

ハイデガーの「メタ存在論」再考

——現存在の被投性とモナドの有限性

阿部 将伸

はじめに

テンポラリテートの分析論に至ったところで、基礎存在論が「存在者全体 (das Seiende im Ganzen)」を主題とする独特な問題圏^が (GA26,199) つまりメタ存在論 (Metanologie) へと、転換 (metaboli, Umschlag) するとハイデガーは述べる (GA22,106, GA26,196-202)。このメタ存在論という造語の接頭辞 "meta" は、「―を超えて」という意味を持たない。上記のことくそれは "metaboli" に由来し、転換・折り返しを指す (酒井 (2001) 53-55)。基礎存在論は、存在者の多様性が存在一般の理念へ向けて、統一的に了解されることを明らかにする (多から一)。そこから折り返して、一なるものとして了解された存在者全体が、いかに多様な区別・分節へ向かいかを究明する (一から多) のが、メタ存在論である。本論考の狙いは、メタ存在論に関する従来の解釈が持つ

不備を補完することにある。

ハイデガーによれば存在者全体は、現存在の被投性・有限性において露わとなる (GA9,110 これをとらえ損なうものとして McNeill (1992) 75-76)。ゆえに存在者の複数領域をたんに合計しても、存在者全体へ到達できなさ (GA26,199-200, GA27,309, GA29/30,404,504-505,514-515)。ここから領域の多様性の問題とメタ存在論の繋がりを否定する見解が生じる (Bernasconi (1993) 29-30, Crowell (2000) 319-320, 長縄 (2009) 254-255)。だがハイデガーの念頭にある存在者全体は、諸領域へ分化・変換する可能性を排しはしない。「この『全体において (im Ganzen)』つまり世界は、まさに多様な存在者の開示性を、それらの様々な存在連関において許容する」 (GA29/30,513-514) と述べられるとおりである。むしろ「存在者の可能的総体性」 (GA26,199) に潜む「存在全体の多声性における行ったり来たりの振動」 (GA27,323)、「存在体制

の全体 (das Ganze der Seinsverfassung)」(GA27,309)、「全体的存在の特別な全体性」(GA27,309)こそがメタ存在論の主題である。

しかし他方でメタ存在論を領域存在論 (die regionale Ontologie) と名指す解釈 (Gander (2001a) 243, (2001b) 227-231, 酒井 (2001) 55-57, 仲原 (2008) 652-653) にも同意したい¹⁾。なぜならハイデガー自身が領域存在論の語を用いないからである。存在者全体にまで遡らずに、個々の領域の成立を論じる領域存在論と、諸領域への多様化を孕む存在者全体に遡源して、個別領域成立の最根幹に迫るメタ存在論とを区別すべきであると、ハイデガーは思念していたにちがいない。個々の領域の成立に関してならば、ハイデガーもまたそれが、「一つの領野―画定的投企 (ein Feld-abschender Entwurf)」(GA27,196) に基づくことを説く。たとえば近代物理学は自然を、数学によって量的に規定可能なものとして先行的に了解すること生じた (GA27,186-189)。存在者の存在体制つまり「存在者が何であり、いかにあるかの規定」(GA27,189)の先行的了解 (領野画定的投企) が各個別領域を存立させる。だがこれでは諸領域のうちの一つを説明するにとどまる。なぜそのつどの領野画定的投企に応じて、あるときは物理学的に、あるときは生物学的に、歴史的に、芸術的に、神話的に：等々の在り方を存在者全体は提供しうるのか、そのような存在者全体における「存在の内的組成」(GA27,309)はいかなるものか、こうした問いにまで取り組まねばメタ存在論とは言えない。メタ存在論は、個別

領域の基礎づけとしての領域存在論の、さらなる根拠を問いつつ。したがって混乱を招きかねない領域存在論という呼称は差し控えられるべきだろう。

要するにメタ存在論は、分節化可能性を斥けた単調で平板な存在者全体を問うのでもなく、他方で存在者の各領域の成立のみを問題にするのでもない。個々様々な領野画定的投企に応じて、多様な在り方を示しうる存在者全体、すなわち多様化可能性を孕んだ存在者全体こそがメタ存在論の主題である (Barrón (1991) 12-18, von Hermann (1994) 87-88, Pöggeler (1999) 126-127, 稲田 (2006) 163-168, 轟 (2007) 141-145)。

本論はまず、根本気分において露現される存在者全体がいかなるものを明確にする (第一節)。ここでは、どの先行研究も触れていない「休むがままの諸可能性」がポイントとなる。つづいてこの「休むがままの諸可能性」に関する理解を深めるために、ハイデガーによるライブニッツのモナド論解釈を参照する (第二節)。そして最後にメタ存在論の前途を示す (第三節)。

一 根本気分と存在者全体

根本気分において現存在が曝される存在者全体が、いかにあるかを本節は描き出す。明らかにされるべきは、多様な在り方へ分岐する可能性を孕んだ存在者全体である。

不安や深い退屈などの根本気分において、われわれ自身も含めた存在者全体が無意義性へと滑り落ちる (SZ,186,

GA9,111-112)。つまり存在者が全体にわたってどうでもよく (gleichgültig) なり、もはやただ「ある」としか言えないような、一様・無差異な境域へと引きこもる (GA29/30,206-210,218,515)。ひたすら「ある」このみを示す存在者全体に曝されるために、現存在はそのつど具体的な「現存在の爲すことと為されることの諸可能性」(GA29/30,211-212) を存在者全体によって拒まれる。

この拒絶する存在者全体とは、「ある」という一点で統一化された、存在者であるかぎりの存在者すべてである。それは存在者としての存在者の全体と表記できる。ゆえに拒絶する存在者全体の範囲は、いま現在にのみ関わるのではなく、将来・既在性・現在の全時間地平にわたる。そのため拒絶する存在者全体に曝されることは、「時間地平そのものによって呪縛されること」(GA29/30,221-222)とも規定される。また「ある」という一点で統べられた存在者全体を裏側から述べるならば、それは、「無に非ず」という仕方で、無から「拒みつつの指示 (abweisendes Verweisen)」(GA9,114)を受けて統一化された存在者全体である。ただし存在者全体から無は剥落するが、無の可能性 (そもそも存在者全体は無でありえたし、いつでも無に帰しようという可能性) は存在者全体の側に残存する。

以上の説明だけでは根本気分における存在者全体が、「である」存在 (Wassein) を喪失し、純然たる「がある」存在 (Daßsein)「へと還元されたものと見なされてしまうかもしれない。だがこれが誤りであることは、存在者全体の拒

絶のうちに、「休むがままの諸可能性の告知」が宿ると述べられる (GA29/30,212) ことから明白である。というのここにおいて、拒絶する存在者の全体がそれ自体のうちに、汲み尽くせないほど多くの可能性を秘めていることが判明するからである。純然な「がある」に見えたものは、無尽蔵の「である」の諸可能性 (無の可能性を含む) を包み込んでいる⁽²⁾。

この休むがままの諸可能性 (die brachliegenden Möglichkeiten) とは一体何か⁽³⁾。休むがままの諸可能性が開示されるのは、存在者全体によって可能性の現実化を拒絶されるときである。よって休むがままの諸可能性とは、可能性としての諸可能性、現実化を前提するのではなく、むしろ現実化を拒むことによって、可能性のもとに滞留したままの諸可能性のことをいう。「休むがままの (brachlegend) 」と、この語に潜む休閑地 (Brache) のイメージに託すならば次のようになる。つまりそれは、どんな種子をも芽吹かせず、現実化させはしない冬の休閑地が、しかしこの拒絶を通して、豊かな穀物の源となる力を育んでいるようなものである。

現実化を拒絶し可能性のもとにとどまることで、存在者全体が蔵する諸々の可能性は、通常想定される範囲内での相互の結びつきから解き放たれて、思いがけない別の仕方での多様な連結へと開かれる。くどいかもしれないが、そこには最も思いがけない可能性としての無の可能性までもが入ることを指摘しておこう。

ただし存在者全体の拒絶は永遠不変のものではない。時が

来たれば休閑地は種子を発芽させる。同様に休むがままの諸可能性を示す存在者全体も、その時間の呪縛が破られる。この突破点をハイデガーは「瞬間」(Augenblick)と呼ぶ。瞬間において「存在者全体は現存在自身に、存在者全体の真只中でそのつと一定の観点で、そのつと一定の可能性のうちで実存する可能性を与える」(GA29/30,226)。無尽蔵の諸可能性から一定の可能性が自在に組織され、現実化されうるものとして現存在に提供されるのである。そしてこれに呼応して各現存在は、別様でもなく、無でもなく、このように存在してしまっているという偶然的在り方を、自らのものとして引き受ける(すなわち決意性)。ゆえにそのつどの「決意性の視線」(*der Blick der Entschlossenheit*) (GA29/30,224)としての瞬間は、別様に非ず、無に非ずとらう「現存在そのものの本質体制における非性」(Nichtigkeit) (GA27,333)に貫かれ、有限性・単独性を刻印されている。このような有限化・単独化された「瞬間が時間の呪縛を破る」(bricht) (GA29/30,226)のである。

かくして根本気分は、世界として統一的に理解された存在者全体の内的組成を露わにする。それは単調な「がある」の空間ではない。むしろ存在者全体は、休むがままの諸可能性を組み替えることで、そのつと区別された多様な在り方を、各々の瞬間へと向けて示すことができる「縮減されざる遊動空間」(*die ungeschälte Spielraum*) (GA29/30,222)なのである。世界としての存在者全体の本質は「遊び」(Spiel)のうちにこそある (GA27,336)。存在者全体が潜ませる「諸区別

そのものの入り交じりと、この入り交じりがわれわれを困らせたり担ったりする仕方」とに、支配されることこそが根本気分であり、この支配 (Walten) のうちから「はじめてわれわれは、存在者の「…中略…」特定の存在体制を把握する」のである (GA29/30,514)。個別領域を存立させる領野画定的投企 (存在者の存在体制の先行的「了解」の根底には、休むがままの諸可能性を蔵する存在者全体つまり「存在体制の全体」(GA27,309) が横たわる。メタ存在論が解明すべき存在者全体は、このように根本気分を通じて明らかになるのである。

二 モナドの有限性の解釈

そもそもメタ存在論の骨格は、ライプニッツをテーマとして一九二八年の講義において浮き彫りにされた。すでに指摘されているようにメタ存在論はモナド論と密接な関係を持つ(酒井 (2001))。ハイデガーは、メタ存在論の観点からモナド論を「暴力的に」読み解きつつ、モナド論に固有の契機を自説に組み込んでいる。この錯綜した関係をほぐし明かしながら、休むがままの諸可能性についての、より踏み込んだ理解を本節は提示する。したがって本節の議論は、ハイデガーのモナド解釈の擁護を意図しない。ハイデガーによって、モナド論のいかなる契機がどのように読み替えられたかを見えるようにするのみである。

ハイデガーによるモナド解釈のポイントは第一に、モナドにおける宇宙＝世界の鏡映が、現存在の超越へと横滑りさせて把握される点にある。第二にモナドの有限性が、現存在の

有限性つまり非性へと変換されることである⁽⁴⁾。一からの多様化の問題を扱うメタ存在論にとって重要なのは後者である。なぜなら統一的に鏡映された世界が、個別の「集中された世界」(an de Volder, 20.6.1703, Grh2,252)として多様化するのとは、モノドの視点の有限性に基づくからである。ハイデガーはこう述べる。「この視点における、存在するものや可能なるもののそのつどの特定のバースペクティヴのなかで、いわば全宇宙が眼差しのうちにとらえられるのだが、全宇宙はそこにおいて一定の仕方で屈折させられる(sich bricht)」(GA26,118)。「そしてそれゆえに宇宙はある種の仕方で、多くのモノドがあるのと同じ数だけ多様化されるのである」(GA26,120)。

一から多への転軸点を視点の有限性に認めるのは、ライプニッツとハイデガーとで一致する。だが有限性の内実はまったく相違する。ライプニッツの場合モノドの有限性は、造物主としての無限なる神に対比された被造性を指す。有限な視点は神によって賦与される(Discours, § 14, Grh4,439)。他方ハイデガーは神の創造を持ち出すことを、「後退」・「独断的説明」(GA26,116)と難ずる⁽⁵⁾。そして創造が除かれた結果、モノドは、自ら有限な視点を設定して単独化を果たすものと解されるのである(GA26,117)。しかし講義ではそれ以上の突っ込んだ議論を展開していない⁽⁶⁾。本稿はあえて、ハイデガーが回避した問題、すなわち神の創造を斥けることがいかなる帰結をもたらすかという問題を追究する。そこからメタ存在論とモノド論の関係が見えてくるからである。

ライプニッツにしたがえば、各モノドが鏡映する宇宙＝世界は、神によって創造されたコノ現実世界を意味する。そのため各モノドが映すのは、コノ世界における過去・現在・未来の全モノド同士が取り結ぶ全可能性である(Discours, §9, Grh4,435-436)。ここで述べられる可能性はすべて、神の意志に基づく予定調和によって、現実化されるべく定められている。逆に現実化の裏づけを欠く可能性、可能性としての可能性は、無数の可能世界として神の観念のうちに留置されている(Mon, §53, Grh6,615-616)。

ところがハイデガーのごとく神の創造を否むならば、予定調和的に規則づけられたコノ現実世界という枠が外れる。それゆえモノドは、現実化を定められた可能性のみならず、神の観念のうちに滞留していたはずの、可能性としての可能性までも映すことになる⁽⁷⁾。しかも世界の現実存在の根拠たる神の創造が払底されるのだから、可能性としての可能性には、無の可能性さえ含まれる。神の創造による下支えを欠いたモノドは、無数の別様な可能性および無の可能性を映しつつ、それら可能性としての諸可能性のなから、そのつど自らの視点を設定し、一定の可能性を現実化させるのである。別様に非ざるもの、無に非ざるものとしてそのつどの視点は生じる。ハイデガーによってモノドの有限性が、非性に貫かれた現存在の有限性・単独性に変換されてしまう。つまりモノドによる有限な視点の設定は、休むがままの諸可能性に曝されながらの、瞬間における決意性へと変貌するのである。一九二八年講義が、「points de vue」(視点)に対して、

“Gesichtspunkt”と“Augenpunkt”とが二つの訳語を充ちしなから（GA26,117）⁷、もっぱら“Augenpunkt”のみを使用する理由は次のようにも考えられる⁸）。つまりハイデガーはモナドの視点（points de vue）を“Augenpunkt”として、現存在の“Augenblick”（瞬間）に引き寄せたいのだと。

しかし、可能性としての可能性を導き出すためだけならば、ライブニッツに依拠しなくてもいいのではないか。現実化を裏づけられた可能性と、可能性としての可能性との区別ならば、哲学史上ライブニッツに限らず見出されるからである。

ではライブニッツの可能性概念の独自性、ハイデガーが休むがままの諸可能性のうちに取り込むような独自性はどこにあるのか。それは、晩年までハイデガーが重視しつつける「現実存在への衝迫（*conatus ad Existendum*）」（24-Sätze,no.5,Ght7,290）⁹、つまりライブニッツの「すべての可能的なもの、は現実存在しようとしてゐる（*Omne possibile Existit*）」（24-Sätze,no.6,Ght7,290）という洞察である。これに基づいてハイデガーは、休むがままの諸可能性のうちに、現実存在への要求という特性を獲得せしめる。だがそれを述べるまえに、ここでもライブニッツとハイデガーの差異を測定しておくべきだろう。ライブニッツにおいてすべての可能性は、①神の意志による現実化へ向けて切迫する。しかも、②その現実化への要求の度合いは矛盾律・同一律に則る。つまり他の諸可能性と矛盾せず、最善の共可能性を実現する諸可能性から成る系列が現実化される（*De rerum*,Ght7,304-305）。

だがハイデガーは神の創造を斥け、矛盾律・同一律を根拠に根づかせる。しかもその際根拠と見なされるのは、「脱根拠（*Ab-grund*）」（GA9,174）としての現存在の有限的超越（被投的投企）である。こうした変更が為されると、①諸可能性はモナドの視点＝瞬間——屈折（*Brechung*）による現実化がそこで生じる——直接向かい、②現実化への要求の度合いは論理法則から解放される。それどころかその度合いを云々すること自体でなくなる。なぜならすべての現実化が偶然的生起となるからである。すなわち、遊動空間としての存在者全体から提供されるそのつどの偶然的在り方を、各モナドが視点＝瞬間において自らのものとして引き受けること（決意性）、ただこの一事が存することとなる。視点＝瞬間における屈折を経て多様化する諸世界は、そのつどこの決意性によって引き受けられる偶然的生起になってしまう。このような生起的＝歴史的（*geschichtlich*）性格が念頭に置かれるので、「各モナドはその覚醒段階にに応じて、世界を表象する一つの世界＝歴史（*Welt-Geschichte*）である」（GA26,119-120）と、講述されるのである。

かくしてライブニッツ固有の可能性概念は変様する。そして変様を被つた現実存在への要求という独特な性格が、休むがままの諸可能性に取り入れられる。つまり休むがままの諸可能性とは、可能性にとどまる可能性でありながら、静まれるものではなく、視点＝瞬間めがけて現実化を求めるという動向を備えた可能性なのである。

ライブニッツに特徴的な可能性概念から取り出された、こ

の要求的性格を考慮に入れなければ、次の文言は理解されえないだろう。「何となく退屈だ。そのことにおいて、全体における呪縛する時間が、破られるべきものとして、ただ瞬間においてのみ破られるものとして、自ら自身を告知する」(GA29/30:224)。呪縛する時間地平の自己告知は、瞬間への指示そのものである。それはなぜかといえ、休むがままの諸可能性が瞬間への要求を具備するからなのである。拒絶する存在者全体はそのまま、瞬間における破れ(Bruch)への時熟を指し示す。またハイデガーがつねに、「破れる(brechen)」という語によって瞬間を徴づけるのは、モナドの各視点における屈折(Brechung)との対応を考慮するがゆえである。統一的に世界として了解された存在者全体は、視点＝瞬間(points de vue = Augenpunkt = Augenblick)において、屈折＝突破(Brechung = Bruch)されて多様な在り方へと分化する。

このような分化可能性を秘め、しかもたんに秘めるだけではなく分化を求めるものこそ、休むがままの諸可能性を宿する存在者全体なのである。さらには、呪縛する時間地平が瞬間を目標して時熟するという動向が、基礎存在論からメタ存在論への転換を促すと考えられる。なぜなら、時間地平としての「テンポラリテートの分析論」[基礎存在論はここまでを含む]は同時に、転回(Kehre)である」(GA26:201「」内引用者)とハイデガーが述べる背後には、時間地平がそのままで、瞬間への切迫であるという洞察が欠かせないからである。いまや休むがままの諸可能性が、メタ存在論の支柱を担

うと言っても過言ではないのである(9)。

ここまでの二つの節で、現存在の被投性とモナドの有限性の解釈が辿られ、存在者全体とは何かが明かされた。存在者としての存在者全体は、自在に組み替えられうる諸可能性を宿しつつ、そのつどの瞬間における現実化を要求する。単独化された現存在の瞬間へ向けて切迫する存在者全体は、そのうちに多様に分節化される可能性を孕んだ豊穡なる世界なのである。

こうしてメタ存在論が扱う一から多の問題は解決される。存在者全体は休むがままの諸可能性を自在に組織して、別様でもなく無でもない偶然的な在り方をそのつど提供する。それを各現存在は自らのものとして引き受けうる。一としての存在者全体から、そのつど多様な在り方が生じるのは、そもそも存在者全体が多を、休むがままの諸可能性というかたちで孕むからなのである。

三 メタ存在論の行方

存在者全体への被投性と、そこでの偶然的な在り方の引き受け(決意性)のレベルで、一から多への問題はすでに解かれている。したがって領野画定的投企による領域の多様化の問題は、メタ存在論にとって副次的なものにとどまる。もちろん領野画定的投企は間違はなく、諸存在者の領域的多様性を生む。しかしいかなる領野画定的投企も、存在者全体から提示されるそのつどごとの在り方と、その引き受けとに基づくメタ存在論の主たる関心はこの基礎部分に存する。この基礎

の上にどんな具体的領域が成立するかを、メタ存在論は確定できない。メタ存在論は、具体的実存が各自の有限性・非性を担う（決意性）ようにと、そして存在者全体への被投性から領野画定的投企が汲み出されるようにと「形式的告示（*die formale Anzeige*）」を為すにとどまる（GA29/30,425-431）。具体的な諸領域の成立に関しては、各実存に委ねるほかないのである。ゆえにハイデガーは、学（どんな学も領野画定的投企に支えられる）を、「そのつどの現存在のそのつどの運命（*Schicksal*）」に関わる事象」と見なす（GA29/30,282）。

ハイデガーによって綿密に実行された領域存在論の一つが、一九二九／三〇年講義での動物論である⁽¹⁰⁾。実際に講義でハイデガーは、動物に関する領野画定的投企が、根本気分（存在者全体への被投性）に規定された、そのつどの歴史性から汲まれていゝることを示唆してゐる（GA29/30,395,274-283）。しかしいづれにせよ、そのつどの決意性に基づいて、その他の無数の領域を逐一精査するという方向を、ハイデガーは選択しなかった。動物論さえ「回行道」と呼ばれるほどである（GA29/30,509）。

最終的にこの回行道は、現存在における「世界形成」（GA29/30,509）・「世界投企」（GA29/30,527）へと続く。つまり存在者としての存在者全体の支配（*Walten*）からのみ発される「形而上学の根本の問い」——「なぜそもそも存在者があるものであって、むしろ無があるのではないのか」——へと繋がる（GA9,122）。それは存在者全体を領域化して了解するのではなく、存在者全体の真只中から、瞬間的決意性とし

て全体を全体のまま問いかける。この問いかけは決意性そのものの具現化であるから、決意性に基づく領野画定的投企とは異なる。そしてハイデガーはこの問いの系譜を、形而上学の歴史のうちで辿る（ライプニッツの根拠律の解体的構築はその途上における特異点である）。さらに一九三〇年代に入るとその延長線上に、存在の創設（*Stiftung*）としての詩作を中心とする芸術論が浮上する⁽¹¹⁾。これらの問題圏はもはやメタ存在論に属さないが、メタ存在論によって指し示されたものである。要するにメタ存在論が存在史的思索の下地を整えたのである。

ハイデガーのテキストからの引用は、次の略号と頁数で示す。

SZ : *Sein und Zeit*, 18. Aufl., Max Niemeyer, 2001

GA9 : *Gesamtausgabe Bd.9 Wegmarken*, Vittorio Klostermann, 1976

GA22 : *Gesamtausgabe Bd.22 Die Grundbegriffe der antiken Philosophie*, Vittorio Klostermann, 1993

GA26 : *Gesamtausgabe Bd.26 Metaphysische Anfangsgründe der Logik im Ausgang von Leibniz*, Vittorio Klostermann, 1978

GA27 : *Gesamtausgabe Bd.27 Einleitung in die Philosophie*, Vittorio Klostermann, 1996

GA29/30 : *Gesamtausgabe Bd.29/30 Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt-Endlichkeit-Einsamkeit*, Vittorio Klostermann, 1983

UV1929/30 : "Unbenutzte Vorarbeiten zur Vorlesung vom Wintersemester 1929/30 : *Die Grundbegriffe der Metaphysik. Welt-Endlichkeit-Einsamkeit*", *Heidegger Studies*, vol.7, 1991, 5-12

【参考文献】

- 阿部将伸 (2008) : 「世界と大地の闘争以前の『世界と大地の闘争』——ハイデガー『形而上学の根本諸概念』講義の「解釈」『倫理学研究』第三八号、一二二・一二三頁
- (2009) : 「ハイデガーの芸術作品論——デユナミス・エネルゲイアの観点から」『アルケー』第一七号、六〇・六九頁
- アガンベン、ジョルジュ (2004) : 『開かれ——人間と動物』、岡田溫司・多賀健太郎訳、平凡社
- Barrón, Jorge Uscarescu (1992) : *Die Grundartikulation des Seins : eine Untersuchung auf dem Boden der Fundamentaldontologie Martin Heideggers*, Königshausen&Neumann
- Bernasconi, Robert (1993) : *Heidegger in question : the art of existing*, Humanities Press
- Cristin, Renato (1998) : *Heidegger and Leibniz : reason and the path*, Kluwer Academic Publishers
- Crowell, Steven Galt (2000) : "Metaphysics, Metontology, and the End of Being and Time", *Philosophy and phenomenological Research*, vol.60, no.2, 307-331
- Deleuze, Gilles (1988) : *Le pli : Leibniz et le baroque*, Éditions de Minuit
- Gander, Hans-Helmuth (2001a) : "Existenzialontologie und Geschichtlichkeit", *Martin Heidegger : Sein und Zeit*, hrg. von Thomas Rentsch, Akademie Verlag, Kap.11, 229-251
- (2001b) : *Selbstverständnis und Lebenswelt*, Vittorio Klostermann
- Grondin, Jean (1993) : "Prolegomena to Understanding of Heidegger's Turn", *Sources of Hermeneutics*, State University of New York Press, Chap.5, 61-81
- 稲田知己 (2006) : 『存在の問いと有限性——ハイデッガー哲学のフクロギョウ的究明』、見洋書房
- 木田元 (2004) : 「ハイデッガーとライプニッツ——寛文書」、『哲学と反哲学』(岩波現代文庫)、第六章、二四七・二八二頁
- Krell, David Farrell (1986) : *Intimations of Morality : Time, Truth, and Finitude in Heidegger's Thinking of Being*, Pennsylvania State University Press
- 串田純一 (2009) : 「脱抑止される生命の衝動たち——超越論的な形而上学と生物の問題」、『現代思想』第三七巻、第八号、一七二・一八六頁
- Leibniz, Gottfried Wilhelm (1875-1890) : *Die philosophischen Schriften Bd.1-Bd.7*, hrg. von Carl Immanuel Gerhardt, Weidmannsche Buchhandlung [Gh.と略記「巻数・頁数を記す」]
- McNeill, William (1992) : "Metaphysics, Fundamental Ontology, Metontology 1925-1935", *Heidegger Studies*, vol.8, 63-79
- 村井則夫 (2005) : 「振動と分散」あざなは『哲学の二つの迷宮』——ハイデガーのモナド論解釈をめぐる『現象学年報』第二二号、三七・四八頁
- 長縄順 (2009) : 「ハイデガーにおけるメタ存在論と根本気分——転回に関する一考察」、『文化学年報』第五八号、二五一・

二六八頁

仲原孝 (2008) : 『ハイデガーの根本洞察——「時間と存在」の挫折と超克』、昭和堂

Pöggeler, Otto (1999) : *Heidegger in seiner Zeit*, Wilhelm Fink

Sakai, Kiyoshi (1993) : "Zum Wandel der Leibniz-Rezeption im

Denken Heideggers", *Heidegger Studies*, vol.9, 97-124

酒井澤 (2001) : 「モナド論・基礎有論・メタ有論——もうひとつの〈ライプニッツ〉ハイデッガー問題」、『思想』第

九三〇号、四七・七一頁

Sallis, John (1990) : *Echoes : after Heidegger*, Indiana University Press

田中末男 (1992) : 「ハイデッガーと根拠の問題」、『名古屋大学文学部研究論集』哲学第三八号、一七・二三頁

轟孝夫 (2007) : 「存在と共同——ハイデッガー哲学の構造と展開」、法政大学出版局

von Hermann, Friedrich-Wilhelm (1994) : *Wege ins Ereignis : zu Heideggers "Beiträgen zur Philosophie"*, Vittorio Klostermann

Wood, David (1993) : "Reiterating the Temporal : Toward a Rethinking of Heidegger on Time", *Reading Heidegger : commemorations*, ed. by John Sallis, Indiana University Press,

136-159

【注】

(1) 当然これらの解釈も、ハイデガー独自の意味が盛り込まれていることを示した上で、領域存在論の語を使う。またメタ存在論が、個別領域を成立させる領野画定的投企に、

形式告示的に関わること（本論文第三節参照）もたしかである。しかしハイデガーは、メタ存在論を「形而上学的存在者論（die metaphysische Ontik）」（GA26,201）とは言い換えるが、決して領域存在論とは呼ばなかった。本稿はこの事実を尊重すべきだと考える。

(2) 「根源的にあり、つづ（*seiend*）」とはすなわち、あるのではないことも——別様であることもできるもの（UV1929,30,8）。根本気分を通じて探究されるのはこのような根源的在り方である。

(3) 論文冒頭で触れた二つの対立的な解釈傾向は、この「休むがままの諸可能性」をとらえ損なうことから生まれるだろう。つまり、存在者全体に多様な「である」の諸可能性が孕まれることを理解しないために、一方で、存在者全体を単調な「がある」へと性急に還元してしまい、他方では、存在者全体が多様に分化する根拠を、領野画定的投企にのみ帰する誤読に陥る。なお「休むがままの（*brachlegend*）」という語は、後のハイデガーの「大地」を理解するための鍵となる。アガンベン（2004）74-114、阿部（2008）参照。

(4) 超越の面のみ取り上げる（Sakai (1993) 103-109, Crisim (1998) 74-75）のでは不十分である。超越と有限性の双方を扱ったものとして田中（1992）、村井（2005）を参照。なおハイデガーがモナドの「囲こ」と「閉鎖」を看過しているというドゥルーズの批判（Deleuze (1988) 36）は当たらない。本節で詳述するとおり、有限化・単独化（つまり囲いと閉鎖）は、ハイデガーによるモナド解釈の核を成す。ただしドゥルーズは一九二七年夏季期講義だけを参照している。そこではたしかに有限性は触れられていない。ライプニッツ・

ハイデガー・ドゥルーズの関係を論じた串田(2009)は、ドゥルーズに対するハイデガーの可能的応答を、ライブニッツを主題としない一九二九/三〇年講義での「囲い込み(Einschränkung)」・「囲い(Schranke)」(1929/30,528)という語のうちに採り当てる(183)。だがすでに一九二八年のライブニッツ講義が、モナドの有限性を「被制限性≠囲い込まれること(Eingeschränktheit)」と説いてゐる(GA26,117)。(5) これに対して、そもそもライブニッツの予定調和は、現象を救うための仮説であつたという反駁が予想される。しかしハイデガーはこう再反論するだろう。現象の救いがたさを、救いがたさとして正視することからのみ道は開かれると。

(6) ライブニッツにおける“essentia”と“existentia”、可能的なもの、現実的なものを考察すると予告され、「本質存在と現実存在への衝迫(essentia und conatus existentiae)」と題されながらも、講ぜられなかった第六節(GA26,123)が、本稿で示すような議論を展開するはずだったのかもしれない。だがその帰結はもはやモナド論の枠には収まらないだろう。これを見越してハイデガーは第六節を省略したのだろうか。

(7) 本論考とは違って田中(1992)は「神が取り外されて」「可能的世界も消える」(23)と解釈し、ハイデガーのモナド解釈を、「神なきモナドロジ」(29)にとらえる。しかしハイデガーは神の創造を否定するが、神を否定してはいない。ただし創造を斥けたとき、神と予定調和がいかに整合的な位置を、モナド論のうちに得るかをハイデガーは明らかにしない。唯一の記述箇所(GA26,119)も、それがライブニッツの言葉をそのまま引き写しているだけなのか、あるいは

神も一つのモナドにすぎないという強い解釈を仄めかしているのか判然としない。いずれにせよハイデガーの関心が、モナド論の整合的解釈に存しないことは明白である。またモナド解釈における神の地位の動揺は、この時期ハイデガーが、自らの存在論における神の位置づけに苦心していたこと(vgl.GA26,211)の反映であると思われる。

(8) 二つの訳語に関する解釈として木田(2004)、村井(2005)を参照。

(9) メタ存在論が「時間と超越からの離れ行き」と並走する(Wood(1993) 139-140)というのは誤りである。現存在の超越の有限性とテンポラリテートのうちにこそ“metaphysisch”が隠れている。Krell(1986)も瞬間を取り逃がす(181)ために、「基礎存在論からメタ存在論を経た“frontal ontology”への移行」(45)と述べざるをえなくなっている。彼の“frontal ontology”なるものは、決意性・瞬間の問いとして、ハイデガーのメタ存在論中に含まれる。その意味では「有限性のラディカル化」(73)に言及しつつ、それが具体的に何を意味するかに関しては、率直に保留しているGrundin(1995)のほうが適切な把握を示している。この空白を埋めるものが、休むがままの諸可能性に宿る瞬間への傾動である。Salis(1990) 112-117も参照。

(10) 「動物は世界貧乏的である」というテーゼは、「動物の本質にそもそも属するものの先行的規定、つまり動物の実証的考察がそこにおいて活動すべき領野の画限」(GA29,30,275)である。すなわちこのテーゼは領野画定的投企である。

(11) したがって一九三〇年代に論じられる芸術は、メタ存

在論構想当時のハイデガーが、一領域と見ていた芸術とは位相を異にする。なおハイデガーの芸術作品論について阿部(2009)を参照。